

歴史点描 59 鱸場という地名の話しー7 御着場と御茶屋

御着場は御着場おつきばと読み殿様専用の船着き場のことを指し、陣屋内の西南の隅近くの松林近辺にある。普段は何となく放置されているようだが参勤の年、この辺りは俄かに活気づく。

丸亀藩の参勤は年明け早々から慌ただしさを増し、網干陣屋にも逐一情報が届いた様子を伝兵衛は短い文言でこう記す。文政2年(1819)卯年は参勤の年である、「2月晦日御参勤ニ付そうじ人足」対岸の鱸場から御茶屋へ向けて渡船されるため、冬の乾季に川幅を確かめるようだ「御着場川幅24間あり」430メートルくらいだろうか、令和の現在、国土交通省いまによると川幅とは堤防から対岸の堤防までの幅の事を川幅と言うらしい。

月が変わって3月7日「御着場直し」翌3月8日には確実な報せが届いたのだろう「御着場直し、渡し場共」板を新しく張り替え杭打ちも万全を期す。このように御着場拵えは殿様の参勤と暇の時期に合わせて準備するのが慣わしで、掛け橋(棧橋)を設け近辺の水尾掃除に続いて石垣繕い・草取り・松葉枝下ろしも怠らないが、このほか普段は出入りのない御茶屋掃除に「掃除人足15人、揖浦道作り人足15人×て30人」が動員された様子だが賃金については記入がない。これらすべて殿様の安全への心遣いに他ならない。揖浦いづらについては機会があれば……

陣屋へ御着座後、間もない七つ時(午後4時)より暮まで御仏参に付引付」殿様が来られると、先ず龍門寺へ足を運ばれるのが常で、これは歴代藩主の位牌が龍門寺に安置されているので、欠かせない行事となっているようだ。伝兵衛は初めての仕事ゆえ後々の参考として引付(手控)を作った。彼らしく手抜かりの無さが滲む。

参勤交代の制度は、慶応3年(1867)には大政奉還が行われ参勤交代制度も正式に廃止となった。永井博／編著『参勤交代と大名行列』

私たちが当たり前のように口にする陣屋について、下余部八木家『公用記』は「従前茶屋ととなえおり唱居り候共、向後陣屋と改め候間、一同並に郷中へも申し達すべし。明治3年3月9日」3月28日矢継ぎ早の通達は、将役人員26人中官船方附属＝水田傳兵衛の役職を載せ、以後傳兵衛の名が浮上することはなかった。

陣屋へと呼び名の変更に伴い「御茶屋下川」と呼ばれていた川も湾洞川と名を変えたが、今は埋め立てが進み宅地へと変貌を遂げている。

網干歴史講座会員 垣内 田中早春

2026、6、15



水田家の墓所がある
濱田龍源寺